

兄弟たち、わたしたちのために祈ってください

百 武 真由美

終わりに、兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。主の言葉が、あなたがたのところでそうであったように、速やかに宣べ伝えられ、あがめられるように、また、わたしたちが道に外れた悪人どもから逃られるように、と祈ってください。すべての人に、信仰があるわけではないのです。しかし、主は真実な方です。必ずあなたがたを強め、悪い者から守ってくださいます。そして、わたしたちが命令することを、あなたがたは現に実行しており、また、これからもきつと実行してくれることと、主によつて確信しています。どうか、主が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるよう。

(テサロニケの信徒への手紙二 三章一〜五節)

テサロニケは、パウロが第二次伝道旅行で伝道した町の一つです。やがてここに、キリスト者の共同体がたて上げられていきました。ところが、テサロニケでの伝道はパウロにとつて、十分にやりきった、という形での活動ではなかつたようです。そのときの様子について、使徒言行録一七章は、パウロがユダヤ人の会堂に入つて行つて三

週間にわたって説教をした結果、一部のユダヤ人と多くのギリシア人や婦人たちが信仰に入った様子を伝えていきます。ところが、それを見ていたユダ人のねたみを買って彼らに暴動を起こされたパウロは、予定を繰り上げて次の町ベレアに向かわざるを得なくなりました。ギリシア人の多くが信仰に入ったことを考えれば、パウロはもつと長い間、テサロニケの町で福音を語り続けたことでしょうか。けれども、言ってみれば「思わぬ邪魔」が入って、伝道活動が妨げられたというわけです。

テサロニケでの伝道の様子を見るにつけ、今日の日本におけるキリスト教伝道のことや頭をよぎります。クリスチャン人口が1%をなかなか突破できない状況の中で、しかし伝道の業が実りないかと問われれば、決してそうではないと思うからです。いや、伝道の結実があることを信じているからこそ、キリスト教学校は今も宗教教育の業に励んでいます。しかし実際の働きのの中では、多くの試練や障壁があることも、認めないわけにはいきません。時代のニーズという名のプレッシャーは、教育においてキリスト教は本当に必要なものなのか？ といつも問いかけられます。また、学校の中の様々な働きの中で、キリスト教を最重要項目と位置づけること自体も、決して簡単ではなくなってきました。加えて近年では、国家の方針により、キリスト教学校にも「道徳」という新しい教科が入ってこようとしています。聖書というこれ以上ない確かな価値観を掲げるキリスト教学校にとって、別の根拠に基づく価値観が学校教育の中に入り込んでくることは、危機感を覚えざるを得ない事態です。さらに、中等教育以上の学校にとっては、小学校時代に国家の掲げる価値観を学び、それが正しいと教わってきた子どもたちを預かるのですから、すでに別の価値観という土台を持った子どもたちに聖書が示す新しい価値体系を示していくということは、決して容易ではありません。(キリスト教学校がキリスト教を掲げることが自明でもない、そういう時代が来つつあります。)

キリスト教学校からキリスト者の教員が姿を消し始め、聖書に導かれた建学の精神が失われていくことは、伝道の最前線の現場から、使徒パウロが追い出されていったあのテサロニケの町の様子とどこかつながるものがあるように思われるのです。

しかしパウロは、テサロニケを去った後も、かの町で信仰を守る兄弟姉妹たちのために祈り、また自分たちのために彼らが祈ってくれることを願いました。

一節「終わりに、兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。主の言葉が、あなたがたのところであつたように、速やかに宣べ伝えられ、あがめられるように。」

パウロは、かつて自らが訪問したテサロニケの教会と、今自分が伝道している他の町との間に、祈りの交わりを見出しています。そして別々の場所で、別々の課題に向き合っているとしても、テサロニケのキリスト者とパウロが、同じ神にあつて、同じ「主の言葉」の業に励んでいることを、彼は訴えたのです。

仮にテサロニケがキリスト教学校だと仮定するならば、パウロに当たるのは一体誰でしょう。主の教会に他なりません。教会こそ「主の言葉」を託され、それぞれたてられた地にあつて、神の栄光をあらわす拠点です。だとすると、教会とキリスト教学校は「わたしたちのためにも祈ってください。」と言ひ合える関係性にあるはずなのです。そして私たちは、今日そのことを確認し、祈りの言葉を合わせるために、ここに集まってきました。

使徒パウロはテサロニケのキリスト者たちに対して、伝道と信仰継承において「悪人や悪者がいる」と言つて苦難があることを示唆します。しかしそれに勝つて、主が真実なお方であること、主の守りがあることも語るのです。

そしてテサロニケにおける働きにおいて、かの地のキリスト者たちに「神の愛とキリストの忍耐を、主が悟らせてくださるように。」と実際にこの手紙において、祈っているのです。

この祈りを今こそ、主の教会とキリスト教学校の祈りしたいと思います。互いに「主の言葉」の働きに励み、場所や役割は異なっても、神の愛とキリストの忍耐とを学びつつ、主が真実な方であることを証言しようとする私たちの、祈りの言葉としたいのです。

祈ることにおいて、私たちは試練や課題を共有することができます。たとえその問題を直接担うことにならなかったとしても、祈ることにおいて、その問題課題に働かれる神の力と權威を私たちはともどもに知ることができ、神の恵みを共に喜び、何より、救いの喜びを共有することができます。ですから私たちはそれぞれ遣わされた場所は働きは違えども、互いに「兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。」と告白し合おうではありませんか。そして「主の言葉が、あなたがたのところであつたように、ここでも」速やかに宣べ伝えられ、あがめられるように」と共に励まし合おうではありませんか。

祈りをささげます。

教会のかしらであり、キリスト教学校をたてたまひし、主なる御神。あなたは私たちに、それぞれの働きを覚えて祈り合う特権をお授けくださいました。そして担う責任はそれぞれに違えども、主の言葉の伝道において共に労することを許してくださいました。どうか、あなたに向かう祈りにおいて私たちが結びつけられ、ただあなたのご栄光のためだけに、ともどもに奉仕することを許してください。またそのことを共に考え、励まし、祈り合うために、今日のひと時が用いられますように。それぞれに時間を割いてここに集うた一人びとりに、あなたのかえりみ

兄弟たち、わたしたちのために祈ってください

を願いつつ、この祈りを、私たちの救い主、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

(二〇一六年六月二十日、「教会と聖学院との懇談会」開会礼拝奨励)